

研究論文

依頼談話の発想と表現

—異文化接触問題の解決をめざした日韓中対照談話論—

沖 裕子 (信州大学)・姜 錫祐 (韓国カトリック大学)・
趙 華敏 (北京大学)・西尾純二 (大阪府立大学)

日韓中の依頼談話を対象に、事例と内省観察によって、発想と表現の巨視的異同を対照的に記述した。依頼行動があって、次に言語選択がある。そのため、社会文化が、意識態度、談話内容、言語表現に影響していることを明らかにした。まず社会文化を観察すると、中国と韓国社会には、積極的に依頼しあうことによって人間関係を構築していく互恵関係構築文化があるのに対して、日本社会にはそれがなかった。中国社会では、依頼し合うことが「関係(グワンシー)」と呼ばれる社会的きずなを築く手立てとして機能している。「関係」の間柄では依頼を基本的に断らないため、頼む側は、依頼相手が実現しやすいように、何をどこまでなぜ依頼するのか、言葉で明確に述べるのが常識ある丁寧な態度だと意識されている。韓国社会の互恵関係はウリ(親密関係)間で成り立ち、中国より軽微な依頼の応酬もみられ、一部様式化している。依頼内容は、相手の現在の状況と自己の実情を言葉で率直に伝える。相手の依頼を断ることはできるが、相手が納得する理由が必要である。日本社会には、相手に頼むことからまず始める互恵関係構築文化は無い。自助と、共同体の共助が基本で、個人的な依頼は相手に迷惑をかける行為だと認識されている。場面意識にもとづいて、状況と心情をそれとなく伝えていくことで、相手の察しを待つ依頼表現が選択される。

キーワード：日韓中対照研究、発想と表現、談話論、依頼談話、異文化接触

A Description of Cultural Attitudes and Language Expression Relating to Request Discourse: A Contrastive Study of Chinese, Korean and Japanese for the Resolution of Cross-Cultural Problems

Hiroko OKI (Shinshu University), Suk-Woo KANG (Catholic University of Korea),
Huamin ZHAO (Beijing University), Junji NISHIO (Osaka Prefecture University)

This comparative study of request discourse in Chinese, Korean and Japanese employs both monitoring and introspective observation. When making a request, one first plans a course of action and then selects the appropriate utterances, and this process is influenced by socio-cultural factors. In Chinese and Korean contexts, there are interdependent relationships not found in Japanese. In China, the function of mutual requests is to promote a relationship known as Guan-Shi, in which requests cannot easily be refused. Typically, request discourse involves a clear description of the requirement and the underlying reason, so that the person being asked can fully understand what is being asked of them. In Korea, where the mutual request system is more stylized than in China, the situation is carefully explained and reference is made to the circumstances of the person being asked. One can refuse such a request, but in that case it is necessary to offer an acceptable reason. In Japan, there are no interdependent relationships based on exchange of requests. Personal requests are

considered troublesome. Therefore, requests are expressed indirectly, and the listener has to infer that a request has been made.

Key words: contrastive study of Chinese, Korean and Japanese, different ways of thinking and expressing, speech discourse, request discourse, cross-cultural contact

1. 問題のありかと本論の特長

本論では、依頼談話を取りあげて、日本語、韓国語、中国語を対照していく。「人・文化・社会を理解することばの対照研究」であると同時に、「ことばを理解する、人・文化・社会の対照研究」をめざしたものである。

日本、韓国、中国は、言語的系統は異なっているが言語連合(language union)の関係にあり、地理的、歴史的に、相互に影響関係が強く長かった。1980年代に入ってから、日本語教育の隆盛もあって市民の人的交流はさらに盛んであり、同時に、異文化接触におけるコミュニケーション上の問題も増えた¹⁾。

異文化接触における問題は、時にはお互いの人格的誤解を引き起こすことにつながるが、最も問題だと思える点は、それらが個人の問題ではなく、言語的文化的差異からくるものであることに気づいていない場合があることである。

そこで、こうした問題意識を共有する日本語研究者として国際チームを組み、10年余り研究にとりくんだ。研究上、本論のもっとも特徴的な点は、日本、韓国、中国を出身とする日本語研究者²⁾が、異文化接触を通じて得たそれぞれの体験を4名で共有しつつ、問題の原因を探るために、内省観察を徹底的に行い、それを一堂に会して対照的に検討しながら、研究を進めたことである。

異文化接触において発生する問題自体をいかに詳述しても、問題の解決には遠い。問題がなぜ発生するのか、そのしくみを解明する必要がある。それには、聞き取り調査では分からないことがある。言語の意味的側面も、文化的暗黙知も、話者の意識のなかであって、外から触れることはできない。また、

言語も文化も体系的であるため、断片的な聞き取りでは解明できない部分がある。そこで、言語の専門家としての知識を活かし、さらに、自身が母語あるいは第2言語話者であることの利点を活かし、研究方法として内省観察を対照させる方法を選択したのである。

その結果、ふだん無意識に行われている談話構築の際の意識や態度の特徴まで、ある程度体系的に記述できたことは本論の長所であろう。一方、短所としては、社会文化は必ず位相を含むため、内省観察がカバーする範囲が狭いことである。ただし、各国の知識階層の社会文化や言語意識、そして、言語内容の組み立て方と言語表現の特徴については、ひとつの典型を、対照的に示し得たと考えている。

各国内の地域的、社会階層的、個人的差異は当然あるため(野田・高山・小林(編), 2014), それらの面に着実に記述を広げていくことは、当然ながら今後の課題として残されている。

2. 対照研究における発想と表現の研究史

2.1 日英対照から出発した発想と表現の研究

言語コミュニケーションのしくみの解明をめざすために、言語対照によって発想と表現の異なりを研究することの重要性は、日本語母語話者の英語学習をひとつの契機として早くに指摘されていた。発想と表現の研究についてまとめた著作を著したのは、国廣編(1982)である。その書名もまさに『日英比較講座 第4巻 発想と表現』であった。編者国廣の執筆になる「総説」のなかでは、次のような重要な指摘を行っている(2-3頁)。

(略) 2言語にまたがって発想を問題にする場合は表現構造はいちじるしく違うのが普通で

あるので、それを出発点とすることはできない。まず、ふつう翻訳という形で示される2言語の意味的に同等な表現が表そうとしているほぼ共通の意味つまり「底層意味」を出発点としなければならない。この共通の意味基盤を Meaning あるいは Message の頭文字を取って ‘M’ と呼ぶことにしよう。翻訳論でつねに問題にされるように、異なった言語の間ではいかに努力してみたところで、まったく同一の M は表わしえないと言ってよいので、ここで言う M はある程度ずれを許容するものと考えことにする。同一の M に基づく表現は言語によっていろいろ異なるかたを示すので、この異なるかたを分析するのが対照言語学的な発想と表現の研究目標である。場合によっては個々の統語法上あるいは語彙的な制約から、かなりずれの大きい M しか表現できないこともあるが、それはそれとして記述しなければならない。

さらに続けて、国廣(1982, p. 4)は、次のような指摘も行っている(下線論者)。

もうひとつ別種の対応表現がある。それは挨拶などのように M は非常に異なっても社会的な伝達機能をほぼ同じくする場合である。たとえば相手からほめられた場合、英語ではそれに対して感謝の意を表すが、日本語では否定して見せるというようなことである。遠来のお客さんを出迎えるとき、日本語では「お疲れでしょう」とねぎらいの言葉をかけるが、英語で同じ意味のことを言うと相手を体力のない人とみなしたことになるのかえって失礼になるので、代りに再会の喜びの表現などがなされる(大杉邦三『英語の敬意表現』参照)。(略) こうして対照表現論は広くは文化まで視野に入れることになる。旅の疲れを思いやってねぎらうことが歓迎されるか否かということは文化によって異なりうるものの考え方であるが、このような考えかたの違いも対照表現論における発想の違いに含ませることができる。しかしそう

すると「発想」によりふたつのまったく異なったことを指すことになり議論を混乱させかねないので、できるならばこの2種類の発想は区別して示すのがよい。たとえば「言語的発想」と「文化的発想」のごとぎが考えられる。

以上、国廣(1982)では、大小の差はあっても、言語対照において A 言語と B 言語を比べると、M と表現の双方ともはずれが必ずあることが指摘されている。M とは、今日的には談話レベルの意味内容であると考えられる。本論では、以後、談話が表す内容、もしくは意味内容、という用語を用いておきたい。

対照言語学における発想と表現の研究においては、「内容と表現のずれは、どのようにあらわれるか」という問とともに、「内容と表現のずれに、文化はどのように関与するか」という問を立てたことが、重要であると考えられる。こうした問の立て方をすることで、両言語にみられる内容と表現の双方のずれを、「言語的差異」の点から説明するだけではなく、「文化的な考え方の差異」の反映としても説明されるべきだとする視点が、明確に立てられたといえる。

表現が言語的にどのように異なっているかを説明するだけでは、それらの言語を真に使用できるようにはならない。なぜ、そうした表現や内容が選択されているのか、その点が記述されなければ、真の使用にはつながらないのである。それを可能にする記述が、対照談話論における発想と表現の研究である。研究史的に明確にこの側面を指摘したのが、国廣(1982)であったことに言及したい。

2.2 発想と表現の研究に必要な談話モデル

発想と表現の研究は、その後多様な展開がなされてきた。三宅(1994)のように、英語と日本語では感謝の言葉に伴う感情のありかたが違っているという興味深い実証研究も含まれている。先行研究の問題点のみをここであげるとすれば、A 言語と B 言語における表現と発想の対照がこれまで部分にとどまるものが多く、体系的に比べる方法論の開拓が遅れていることであろう。

時間的展開⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒

A	社会文化	
B	意識態度	
C	内容構造	
D	言語表現	

図1 談話の同時結節モデル（部分）

発想と表現の研究を有効に進めるためには、表現の異なりと、文化的側面の両者を視野に入れることができるモデルが必要である。表現については、何を述べるか、どのように述べるかを分離して扱い、また、文化については、社会文化制度そのものと、意識や態度のありかた³⁾を分離して扱う、下記のモデルが必要であると考えられる。

社会文化、意識態度、内容構造、言語表現の4層が、時間的に同時に結節していくとする図1のモデル（沖，2010）を、本論の記述では採用したい。

3. 日韓中対照談話論の必要性

3.1 なぜ日韓中を対照させるのか

本論では、なぜ、発想と表現の観点から、日本語、韓国語、中国語を対照させるのかについて、まず、述べておきたい。

言語類型論的には、中国語は孤立語、韓国語と日本語は膠着語の特徴を示し、これら3言語には、系統関係はみられない。しかしながら、地理的には東アジア地域にあって隣接し、歴史的には、漢字文化圏として表記に共通性をもち、文化的にも相互交渉の歴史が長く、日韓中は言語連合(language union)の関係にあるとされる（『三省堂言語学辞典』）。

日韓中における言語接触、文化接触は、歴史的に長期にわたり行われたうえに、1980年代以降は、グローバル化と日本国の経済的地位の向上に伴い、日本語教育が盛んになるとともに、日本語を媒介語として、日本語、韓国語、中国語の言語接触が盛んになった。それに伴い、人格的誤解につながるような異文化接触の問題が起きている（沖・趙，2010，2015；沖・姜・趙・西尾，2010）。それらは、言語使用において、気づかれにくい差異があることが知ら

れていないことにもよる。本論は、対照記述を推進し、知識化することで、問題解決の第1歩を踏み出そうとするものである。

3.2 なぜ依頼談話をとりあげるのか

次に、なぜ依頼談話をとりあげるのかについて、述べておきたい。それには、なぜ、特定の談話種（談話の種類）を対照させるかという問と、数ある談話種のなかから、なぜ依頼談話を選ぶか、という二つの間に答えなければならない。

依頼に限らず、謝罪や感謝などいずれの談話種であっても、対照させてみると、その伝達機能について言語間で差がないとは、決して言えないことに気づく。国廣(1982)が、社会的な伝達機能をほぼ同じくする場合のA言語とB言語の対応表現の研究を「文化的発想」の研究として挙げていたが、意味内容と表現が異なるだけでなく、これから本論で述べていくように、談話種は、その言語固有の表現体系の中でそれぞれの価値を有し、汎言語的な定義が困難であることに気づく。すなわち、言語間で同一の社会的機能を有した表現の展開、というものをとらえることが難しい。

そこで、談話種を分析対象にとりあげることで、社会的機能、内容、表現のいずれにも、ずれをみせる対象を分析していく方法論を開拓し、実際に記述することが、本研究の目的の一つである。

つぎに、談話種のなかで、なぜ、依頼談話をとりあげるかといえば、依頼という談話行動を抜きにしては、人が言葉を使用することを語れないからである。言葉は、人と人が共同行為をするために必要不可欠である（千野，1980，p. 9）が、依頼という相互行為は、その典型的側面をもっとも多く擁した談話種のひとつであるといえるからである。

4. 社会文化を記述する重要性

4.1 言語選択における社会文化という要因

先に国廣(1982)は、文化による考え方の違いがあり、それが文化的発想となって表現に影響を及ぼしている側面を指摘していた。本論で新たに指摘したいことのひとつは、文化的発想が、それぞれの社会文化制度の異なりによって生み出されていることで

ある。これまで、社会文化が各国で異なっていることは、文化史の問題とされ、言語とは関係なく記述が行われてきた。しかし、依頼談話というような談話種の発想と表現の対照を行う場合には、言語表現と社会文化制度そのものは密接に関係しあっている。

依頼談話についてみれば、次のようなことが言える。まず、依頼という行動は、言語の選択以前に人と人が行う相互行為のなかで達成される。依頼は、行動そのものの成功を目的として行われるため（ネウストプニー、1995）そこで、言語選択以前にしたがっている社会文化制度そのものを、まず知る必要があるのである。

依頼談話を対照談話論的に解明しようとするとき、社会文化制度のなかでも、依頼を行うことができる人間関係の構築のしかたが、記述の俎上に乗ってくる。依頼の談話行動を展開していくためには、日常の依頼が、どのような人間関係のなかで、何を注意点として行われているかを見る必要性がある。

注意点とは、その共同体の一員であれば、説明はできなくても、大なり小なり一般常識として受け入れられているレベルの感覚を指す。地域的、社会階層的な揺れは当然であろうと思われるが、日韓中という言語の異なりの大きな言語社会を対照させることによってみえてくるような巨視的な差異を、本論では記述対象とする。

また、ここでは、歴史的な変容、由来、今後の変化可能性については問題にしない。現代社会において、ありふれて見られる現象が記述対象となる。

以上、本論で日本社会、韓国社会、中国社会という用語が指すのは、こうした意味で用いていることをこたわっておきたい。

日韓中の依頼談話にかかわる社会文化には、次節のような異なりのあることが記述できる。

4.2 日韓中社会における互恵関係の有無と様態

4.2.1 互恵関係とは

日韓中を対照すると、人間関係の構築という点で、注目すべき観点がみられた。それは、「互恵関係の有無と様態」である。「互恵関係」とは、実利を相互に与えることを目的として個人間で構築さ

れ、両者ともに、互いにそうした関係にあると認識している人間関係のことを指す。相手に対して、金品や手間を用立てる場合、自分も困ったときには相手も見合った用立てをすること、また、それを両者がわきまえてその人間関係を構築しているのが、ここでいう「互恵関係」である。互いに用立てるということだけではなく、実利の交換関係にあることを、両者が認識して関係構築をしていることが要点のひとつである。互恵関係は、個人と個人の間には結ばれる。

これは、中国社会、韓国社会には、ありふれて見られるが、日本社会にはみられない社会文化である。また、中国社会の互恵関係と、韓国社会の互恵関係は、定義は共通するものの、その機能と様式の点で違いがある。

4.2.2 中国社会の互恵関係

中国社会における互恵関係の典型は、次のようなものである。中国社会では、互恵関係にある人を「関係（グワンシー）」と呼ぶ。積極的に相手に依頼し、相手は自身の面子（メンツ）にかけて実現していくという繰り返しの中で、「関係（グワンシー）」は、情緒的にも結ばれていく（坂本・薛、2014に詳しい）。

「関係（グワンシー）」は、最初からあるわけではなく、双方の努力によって築き上げていくものである。そして、「関係（グワンシー）」を有効に築き上げていくために、実利を伴った依頼の応酬が重要な手段になっていることが中国社会の特徴である。「関係（グワンシー）」が結ばれると、それにつれ、相手と自分は同じ感覚にあるという（坂本・薛、2015, p. 159）情緒の交流も深まっていく。

依頼行動は、なにもないところから関係構築をする際の始発行為としても利用されている。日本社会では、間柄が密でない人と、今後の人間関係構築を期待して、相手にまず何かを依頼するところから始めるというコミュニケーション行動はみられない。もし、そうした言語行動をとれば、その人間関係はこわれてしまう危険性が高いといってもよいことと比較されたい。後述するように、日本の社会文化には、互恵関係の習慣がみられないことと関係する。

中国では、「関係（グワンシー）」に入る意思があれば、相手が起こした依頼を受容し、自身の面子にかけて実を上げること自体が価値を有した重要な社会的行為となる。逆に、依頼されることは、自分の面子が評価されたことにもなる。中国の「面子」とは、事を実現させる能力評価を指し、対人関係におけるポライトネスでは、自他の面子をおとしめないようにすることが配慮の要点となるとともに、こうしたしほみを背景に、「褒め」が面子を立てる手立てにつながるのである（後述「6.2」）。

さらに、「関係（グワンシー）」にある人にはどのようなことも頼めるが、それ以外の人には、重要な依頼行動そのものが起こらない、ということも中国の特徴である。たとえば、「関係（グワンシー）」とは、水路を作ることに似ている。川の流れが作られれば重要な依頼ができるが、川以外の場所では実効ある依頼をもちかけることができないのである。

私的依頼だけでなく、公的な依頼も「関係（グワンシー）」に頼むことでなめらかに運ばれていく。また、依頼事を受けた相手が自分自身の力で依頼内容を実現できない場合は、自分自身の「関係（グワンシー）」にさらに依頼していき、面子にかけて実現していく（後述「6.2」）。こうして、「関係（グワンシー）」の広さが、その人の社会的能力を支えていくしほみが社会文化制度として機能している。日本社会では、相手からの依頼を実現するのは、受けた当人までであることが多く、自分ができないことをさらに他者に頼んで実現させる場合のほうが少ないと思われることと比較されたい。

4.2.3 韓国社会の互惠関係

韓国社会にも互惠関係の習慣が存在する。しかし、中国と比べると、その機能と様態が異なっている。

韓国社会では、相手がウリ（我々）と呼ばれる人間関係にある場合にのみ互惠関係が見られることが特徴である。ナム（他人）と呼ばれる人間関係であれば、その場限りの、韓国社会では常識的な依頼をすることはあっても（ジュースを買うために、その場で足りない小銭を用立ててほしいなど。姜

(2007)), 互惠関係には入っていかない。中国では、「関係（グワンシー）」を作るために、依頼は重要な手立てとして機能しているが、韓国社会における依頼は、ウリとなるための行為として働く場合もあるが、むしろ、ウリという人間関係が確立しているところで、ウリとしての情感の交流を深めるための手立てとして、依頼の応酬が行われる。依頼にともなう実利は比較的軽微なものも多くみられ、また、行動もある程度様式化している。ちなみに、互惠関係は、個人と個人のやりとりとしてつながっていることは中国と似ている。

韓国社会は、儒教を学問や思想として受け入れた日本社会と異なり、儒教の礼法が社会制度として機能し（尾藤, 2000, p. 215）、発達した敬語使用においては、長幼秩序が厳しく守られる。しかしながら、たとえば相手とウリである場合には、目下のものから、「밥 좀 사주세요（ご飯をおごってください）」という依頼をもちかけることは自然なことである。互惠関係にあるウリの間柄では、そのような依頼に相手がこたえることによって、ウリとしての親しさがより深まっていくのである。そして、次の機会には、ウリ同士の前回の依頼を前提に、目下である場合は小さなものを「自分がおごります」と申し出たり、同輩であれば、「今日はおごるよ」と言ったりし、それが相手に受け入れられる。こうした軽微な実利の応酬が行われることで、ウリとしての隙間のない親しみが増していくのである。日本社会では、同輩同士もしくは目上から目下に「ご飯、おごるよ」とは言えるが、同輩同士もしくは目下から目上に、相手がおごると言わない先に「ご飯、おごって（下さい）」と言うことはむずかしい。このことは、日本社会に、依頼することから始まる互惠関係がないことの証左のひとつとなる。いずれにしても、中国とはその機能と様態が異なるが、社会文化として互惠関係を築く習慣が、韓国社会には存在しているのである。

4.2.4 互惠関係の社会習慣が無い日本社会

日本社会の日常生活では、相互依頼を利用して構築される互惠関係は見られないといつてよい。

社会生活のうえで互いに融通を利かすことはある

が、「実利の交換」という側面は、強調されないように配慮されることが、ここで言う中韓の社会文化制度としての互惠関係とは異なるのである。日本社会では、融通を利かしたことがあったとしても、それは利かした側がそれで済んだとしておくことが肝要であって、次の何かの機会がある場合に、利かした側が相手に対してその見返りを当然のこととして要求するための依頼行動は、まず見られないことが特徴である。

それでは、日本社会における依頼は、どのように行われているのだろうか。

日本社会では、ウチの共同体のなかでは大小の依頼が行われる。日本社会では家族の紐帯は相対的に強く、きわめて個人的な重要な依頼がためらいなくできるのは、典型的なウチの関係である家族間に限られるといってもよい。換言すれば、家族以外の、社会人としての人間関係のなかでは、重要な個人的依頼はできるだけ回避されるのが特徴である。

それが友人であっても、あるいは、友人であるからこそ頼めない、という事態も生じてくる。韓国社会における友達（チング）とは、「迷惑をかけあうのが友達だ」とされ、迷惑についても互惠的にやりとりすることで仲を深めていくコミュニケーションがあることは大きくかけ離れている。日本社会では「人には迷惑をかけないようにする」ことがよしとされ、その範囲は、親しい友人であっても当然のこととされ、場合によっては最もウチの集団である家族に対しても精神的姿勢として守られていく。

井上(2013)も指摘しているように、依頼とは、貸し借りがなく状態で安定している人間関係の均衡を破る行為と感じられるため、何か個人的なことを頼まざるを得ない場合には、たいへんに気を遣うことになるのである。

互惠関係は、個人と個人で結ばれていくものであるのに対して、日本の社会文化においては、相手に迷惑をかけず自分で解決していく姿勢（自助）と同時に、困らないように共同体として助け合いのしくみをつくっていく姿勢（共助）が見受けられる。これは各国の政治制度による公助のシステムとは別に、大小の共同体をつくって助け合っていく日本社

会のありかたが強いように見受けられる。

ちなみに、日本社会におけるウチが指すのは、集団全体であり、ウチ集団という共同体のなかの自己の位置が意識されていることも互惠関係が社会文化制度にならないことの一因であろうと思われる。たとえば、「今晚は、ウチでご飯を食べる」「ウチの人に聞いてみる」「ウチに帰る」などの日本語の使い方では、ウチは、家族集団のことを指している。社会生活においては、「ウチの課長は、今日、休んでいる」「それは、ウチのやり方とは違う」などという使い方によって、その人のウチと意識される範囲が特定されていく。日本語のウチとは、個人を指すのではなく、自身が属しているその共同体の範囲を指し示す用法である。また、ウチと対立関係にあるのは、ソト、ヨソであるが、「ソトに出掛ける」「ヨソでは、どうか知らない」など、これらも、個人を指すのではなく、自身が所属しない共同体を範囲として指している。

こうした、共同体を意識する社会文化（尾藤、2000）を背景に、依頼も、個人と個人が相対して行う、というコミュニケーションではうまくいかないことが多い。共同体を構成する一員として依頼せざるをえない事情を訴え（それがかなえられないと、結局は集団＝共同体の和を乱すなど）、依頼された側は、その事情を汲んで、依頼をかなえていくのである。

次節では、社会文化の相違が、依頼の意識態度にどのように影響しているかについて、記述していく。

5. 社会文化を反映した依頼の意識態度

5.1 依頼の意識態度の差異を生む要因

依頼するときの意識と態度²⁾は、上述のような社会文化を反映して、日韓中で、それぞれ異なっていることを指摘する。これから述べていくように、少なくとも依頼談話の産出に関してみたと、普遍性よりは、個別性が際立っている。

ここでは、依頼の意識態度について、日韓中の異同を記述していきたい。依頼の意識態度は、社会文化によっても影響を受けるし、また、言語それ自体

が要因となることもある。後者については、たとえば、井出(2006)が主張するように、敬語という言語体系の有無によって、ポライトネスの枠組み自体が異なることが、その一つの例であろう。

5.2 中国の依頼の意識態度

中国の依頼の意識態度は、内省観察では、次のように記述できる。

中国語では、依頼事をはっきり言うことによって相手が事を運ぶのに有利になる、という共通の認識がある。そのため、依頼内容について、たとえ予告していたとしても、そのつど改めて説明するのが普通である。

自分が依頼者である場合には事態をはっきりと説明することが常識にかなない丁寧である、というのがこの場合の中国語話者の意識である(沖・姜・趙・西尾, 2011)。

なぜ、「依頼事をはっきり言うことによって相手が事を運ぶのに有利になる」と考えるのだろうか。これには、先に「4.2.2」でみた、中国社会における人間関係の構築のしかたが影響している蓋然性が高い。すなわち、安定的な「関係(グワンシー)」にある場合には、依頼事はまず断られない。断れば「関係(グワンシー)」とはいえないからである。実利の応酬をつうじた互惠関係では、相手が依頼をかなえてくれることを前提にしている。そのため、何をどこまで頼むのか、依頼内容をはっきり言うことが、依頼をかなえようとしている相手のためにも失礼ではないと捉えられている。

「自分が依頼者である場合には事態をはっきりと説明することが常識にかなない丁寧である」という内省も、「関係(グワンシー)」の在り方を前提にして醸成された「社会常識」であり、「丁寧」と感じられる意識だといえる。つまりは、社会文化のありかたが、事柄の述べ方や丁寧さの意識形成の要因となっている様が観察される事例である。

上記は、後述する日本社会の依頼の意識態度とは大きく隔たっていることは言うまでもない。また、このあと述べる韓国社会の依頼の意識態度とも異

なっている。

ちなみに、「はっきりと明確に自分(個人)の考えを述べる」ことは、中国社会における言語使用の基本態度にもなっている。本論では、依頼談話を対象にするためこれ以上触れないが、もっと広くは、言語観あるいは言語使用観そのものに、言語文化による差異がみられる可能性がある。

なお、これから「関係(グワンシー)」を結んでいこうとする場合、もちかけられた相手が「関係(グワンシー)」に入りたくない場合には、相手の依頼に関心を示さないようにする談話行動が観察される。その様態はさまざまであり、様式化されたものではないようである。

5.3 韓国の依頼の意識態度

姜(2007)は、日韓の差異について調査し、次のようなイメージがあることを指摘している。

日韓のコミュニケーションにおいて、依頼をめぐる両文化にはかなりの差がみとめられる。韓国通の日本人は、「韓国人の頼み方は突然で強引なところがある」「会ったばかりなのにいろいろと頼んでくる」「友達だからといって無理なお願いを平気でする」などといったイメージを持つことが多い。一方、日本通の韓国人には、「日本人は、はっきり言わないので、頼んでいるのか頼んでいないのかがわかりにくい」「単純でつまらないことを、必死にお願いする」「友達なのに、頼りにされていない気がする」などというイメージがあることが確認される。

日本人からみると、なぜ、「韓国人の頼み方は突然で強引なところがある」「会ったばかりなのにいろいろと頼んでくる」「友達だからといって無理なお願いを平気でする」というイメージがもたれるのだろうか。これも、先に「4.2.3」「4.2.4」でみた、日韓の社会文化の差異が要因となっていることが容易に推測される。

前述したように、韓国の社会文化では、相手をウリと認めれば互惠関係に入る社会文化がある。「会ったばかりなのにいろいろと頼んでくる」こと

は、相手をウリと認めれば当然の依頼行動であるが、互惠関係の社会文化が無い日本人からみて、「韓国人の頼み方は突然で強引なところがある」という印象につながるであろう。また、韓国社会では、「迷惑をかけあうのが、友達」という意識があり、少しばかり無理な依頼の応酬が、かえって仲を深めていくからでもある。

さて、韓国の依頼の意識態度は、内省観察では、次のように記述できる。

韓国語では、ウリに対しては、「はっきりと、率直に、包みかくさず言葉で述べる」ことが基本である。丁寧さは発達した敬語によって表現されるため、「はっきりと、率直に、包みかくさず言葉で述べる」ことは、丁寧さとは関係のない、ウリに対する基本的な言語使用態度としてある。

依頼された場合、たとえ自分に負担があったとしても、友達であれば、依頼されることが迷惑だとは思わない。むしろ、依頼したり、依頼されたりという応酬が続いていくなかで、より親密で隙間のない気持ちがかよいあう関係へと発展していくことに好ましさを感じる。

こうした依頼の意識態度が醸成される要因を考察するには、韓国社会のウリの行動様式を知る必要がある。「相手の家の台所のスプーンの数まで知らないとウリではない」と、かつてはよく言われたように、ウリであれば、お互いの状況を知り合っていることが当然という意識がある。そのため、メールより手軽に連絡がとれやすいSNSか、スマートフォンや携帯電話の肉声の会話を通して常時連絡しあうことが、中年層以下のウリの常態である。連絡は、スマホや携帯電話で常にとりあい、よほど格式のある場で無い限り、他者と会っているときに携帯電話が入ってきても電話をとることが当然視される傾向があるのは、ウリの連絡の密接さが容認されているからである。携帯電話をとるあげ常識が日韓で異なっていることは、韓国ドラマでも簡単に観察できる。日本社会では公私を分け、公的場では私的電話

は許容されない。

相手の状況を常時熟知しているウリ同士の依頼では、相手の負担の度合いについても互いに知ることができる。そのため、依頼を行う場合には、無理な依頼のようでも、相手の状況を十分知って頼んでいることになる。

そのため、相手に過度の無理をかける依頼であれば、「相手の状況を十分知りつつ頼んでいるのだ」という、相手の状況に自分は無関心ではなく十分に気づいているとする態度が、配慮としては必要になる。しかし、依頼することそのものについては、友達に対して申し訳ないという態度はとられない。相手に率直に依頼し、相手の依頼はかなえるのがウリという関係だからである。ウリの間柄は、心身ともに隙間無く親密な情感で結ばれることがよしとされる。ウリであれば、相手の物を使うとき、たとえばペンを借りるような場合にも黙って使い、感謝も述べない。ことごとしく感謝を述べれば、ウリではない。

また、ウリからの率直な依頼を、率直に言葉で「できない」と断ることができる。しかし、その場合は、相手が納得できるような理由説明が必要である。交流の密なウリである相手が知らないでいる、断らざるをえない状況ができたことを、相手が納得するように言葉で説明する必要があるのである。

5.4 日本の依頼の意識態度

日本の依頼の意識態度を内省観察すれば、次のように記述できる。

依頼とは、相手に迷惑をかけること、という意識がある。また、何かを依頼することは相手に迷惑をかけることであるから、相手に対して申し訳ない気持ちを抱かせる。依頼しなくてすむのであれば、それに越したことはない。

どうしても相手に何かを依頼しなければならない場合は、できるだけ、遠慮がちに遠回りに言うほうが丁寧である。相手が気持ちよくかなえてあげようという心情になれば、少しずつ状況を説明していく。相手に断られそうな場合は、正面きって断られる展開にならないよう、

依頼をこちらから引込めるタイミングをみはからって、少しずつ話を進めていく。

公的な役割によって、その相手に依頼することに必然性があるような場合でも、依頼して当然であるという態度はとれない。基本的に、相手に、お願いをしていく態度で接することが丁寧である。

上記は、あくまでも論者の内省における記述であるため、地域差、社会差、個人差などのゆれは、当然あるであろう。しかしながら、日本における依頼の意識態度の典型のひとつではあると思われる。

先に姜(2007)でみた、日本通の韓国人のイメージに、「日本人は、はっきり言わないので、頼んでいるのか頼んでいないのかがわかりにくい」「単純でつまらないことを、必死にお願いする」とあるのは、上記の内省と照らすとその理由が分かりやすくなる。また、「友達なのに、頼りにされていない気がする」という点は、日本社会に互恵関係による人間関係構築の習慣がないことによるであろう。

日本語の言語使用時の(無意識的)態度としては、「言わなくても分かることは、できるだけ言わないようにする」ということが基本にある。これは、場におかれた相手と自分の状況全体を視野に入れた言語使用が基本となっているからだと考えられる(井出, 2006; 沖, 2013)。これを「場面意識」と呼ぶ(時枝, 1941)。日本語研究においても繰り返し指摘されてきたものである。ちなみに、表現も、言語にすべてを託さず、相手の察しを待って、補完的に談話伝達は完成する(池上, 2000)。寄り添って同じ場所から同一のものを見るような意識で行われるコミュニケーションのうちに、気持ちを通わせていく日本語の基本的な言語の使用意識と態度がある。

逆にいうと、自分と相手が置かれた状況を含む場全体の理解が両者で共有できない場合には、その状況全体を説明して共有しようとすることで伝達を達成しようとする(沖, 2015)。もしそれでも相手が理解しないようであれば、依頼自体を引き下げるか、言葉ではっきりと依頼内容を述べて不興を買い、相手と決裂する結果となる、ということもあり

得るのである。

上記のような言語使用の意識態度から、依頼を断る場合も、状況を述べ、自分自身の苦しい心情を描写することで、相手に返事の内容を察してもらう表現が選択される。

6. 日韓中談話の内容構造と言語表現

6.1 談話の内容構造と言語表現とは

では、こうした社会文化や依頼の意識態度を背景として、依頼談話はどのように産出されているのだろうか。何を述べるかという談話の内容構造と、どのように述べるかという談話の言語表現とを、ここではとりあげ、分析考察していきたい。

言語資料として、中国語、韓国語、日本語の実例メール談話をとりあげる。メールは、音声ではなく文字を媒体とし、即時的な話者交代を欠くが、特定のいま・ここをふまえ、かつ、時間的隔てがあっても相手からの返信が前提とされる点では、談話の特徴をそなえている。ここでは、資料の扱いやすさの点で、メール談話資料をとりあげたい。

なお、実例談話資料収集にあたっては、話者関係や話題を統一する方法を採用しなかった。なぜなら、先に国廣(1982)でも述べられているように、また本論でもここまで記述してきたように、話者関係の枠組みそのものや話題のもつ意味、依頼事の軽重の判断さえが、社会文化によってかなり異なっているからである。また、談話は創造的単位であるため(沖, 2006)、1回1回の談話の表現形式は多様性に富んでいる。そこで、個別の言語体系を観察したうえで対照させる立場をとった。

談話資料は、見やすさを考慮して行間の空きは削除し、固有名詞は仮の名で示した。中国語、韓国語資料の日本語訳は、あくまでも原文理解の目安として、直訳を心掛けて添えたものである。中国語の実例(1)(2)(3)は趙が、韓国語の実例(4)(5)は姜が、日本語実例(6)(8)は沖が、(7)は西尾が収集した。なお、日本語の用例(6)は、沖(2010)が初出。(6)(7)(8)は、沖・趙(2015)で使用分析したものを引用した。

6.2 中国語の依頼談話：収集実例より

次にみる中国語の依頼談話には、これまで述べて

きた社会文化と意識態度の反映がみられる。まず、用例(1)をみられたい。大学教員に推薦状を依頼する学生のメール談話である。大学教員と学生は個人的利害に結ばれた狭義の「関係(グワンシー)」とは言えないが、必然性のある依頼場面であるため、談話展開にはよく似た基本的な特徴が現れている。

(1)の二重傍線部分「 」を見ると、依頼内容を明確に述べていることが分かる。また、傍線部分「 」は、相手を立てる言語表現が使用されている。なお、中国語の「谢谢」は、日本語の「ありがとう」が事をかなえてくれた後に発話されることと異なり、依頼事に先立って発話される。むしろ、「よろしく願います」と訳した方が気分は伝わる。これは、相手の面子に配慮した表現である。

(1)大学生から先生へ(推薦状の依頼。大学教員は、推薦状を書くことを断ることができる)

亲爱的宋老师：

您好。有关推荐信的格式和纸张我已经确认过了。没有特殊要求，中文写即可。内容如有不妥的地方，烦请老师修改。谢谢老师了。

張建国

親愛なる宋先生

こんにちは。推薦状の書式と紙のサイズは確認しました。特別な決まりはありません。中国語で書いていいです。内容には適当でないところがあれば、ご面倒ですが直して下さるようお願いします。先生、ありがとうございます。

張建国

次に(2)は、エッセイの執筆依頼のメール談話である。二重傍線部で、依頼する事情を明確に述べている。また、傍線部で、相手の面子を立てる表現を添えている。

(2)同じ仕事をしているグループのメンバーへ(エッセイ執筆依頼)

周老师：

您好！

有件事情本来是想一起谈一谈的，您提前回去

了。17日下午和劉小妹，陳偉两位老师聊了聊，具体是前些时候接到国际交流基金相泽老师的联系，谈到丛书的事情，详情请见附件（第四册）。我们都认为，您在日本这几年一定有很多切身的体会，是有内容可写的。不知您是否感兴趣？

我觉得这是件有意义的事情

您先看看，有什么想法请告知。

孫麗

周先生

こんにちは。

実はお話したいことがありましたが、お先にお帰りになってしまいました。17日の午後、劉小妹，陳偉両先生と話し合いをしました。先日、国際交流基金の相沢先生から連絡があり、叢書のことについての内容でした。詳しいことは添付ファイルをご覧ください（第4冊）。先生はここ数年日本にいて、身をもって体験したことがたくさんあって、書くことがあると私たちは話していました。ご興味がありませんか？
大変意義のあることと存じます。

ひとまず添付ファイルをご覧になって、どんなお考えがあるのか教えて下さい。

孫麗

次の用例(3)は、先生からかつての教え子へ、自分の友人に対してよい卓球指導者を紹介してほしいという内容のメール談話である。二重傍線部では、卓球の好きな友人と自分との関係が詳しく述べられている。これは、その友人が自分とどのような「関係(グワンシー)」にあるかを説明している部分である。先に「4.2.2」で記したように、中国社会では自分の力で依頼事を実現できない場合は、自身の「関係(グワンシー)」を利用して依頼の実現相手を探していくが、そうした行動の過程で出されたメールにあたる(薛・坂本(2014)は、このメール談話を引用して、同様の説明を行っている)。

傍線部の「能」は、相手がこの申し出を受けるかどうか、選択の余地を与える表現で、丁寧な配慮にあたる。また、「找找」では、繰り返し表現を用いて和らげている。「拜托啦」は、相手の面子に配慮

した表現である。

(3)先生からかつての教え子へ（卓球指導者を紹介してほしい）

你好！我是温唯。

我有一个特别喜欢打乒乓球的朋友，他给我母亲看过病，现在想找一个高手指导他一下，费用按你们的行情，你能帮我介绍一位吗？你如果方便最好，你帮我找找呗，拜托啦！

こんにちは。温唯です。

私には卓球の大変好きな友達があります。彼は母の病気を治療したことがあります。卓球を指導してもらえる達人を探しています、費用はあなたたちの相場に従います、あなたは私のために一人紹介することができるでしょうか？あなたの都合がよければなによりですが、適任者を探してみてくださいね、よろしく願いますね！

以上、中国語の依頼談話の内容構造と言語表現の特徴的な個所を説明した。

6.3 韓国語の依頼談話：収集実例より

次にみる韓国語の依頼談話には、これまで述べてきた社会文化と意識態度の反映がみられる。まず、次の用例(4)をみられたい。(4)は、大学生から担当教員へ、推薦状の依頼をするメール談話である。大学生と担当教員は上下の距離感がある関係であるが、本論で扱う典型的ウリに対する依頼の談話展開と同質の特徴がみられる。まず、二重傍線部に示したように、依頼するにあたって、自分自身の状況を、隠さず、率直に述べている。また、傍線部に示したように、締め切り時間まで余裕がないため相手に無理がかかること、また、相手はいま忙しい状況である、ということを言葉にし、依頼にあたって、相手に無関心ではなく、相手の状況を自身は確かに把握していることを伝えている。これが、韓国では、相手への配慮になるのである。「죄송합니다」は、日本語に訳せば「申し訳ございません」になるが、日本語話者が感じるような、相手に無理をかける状況全体に対して恐縮し畏まる気分とは、やや異なって

いる。謝るべき事柄を認識し、それについて詫げる表現である。つまり「自分が悩んでいるうちに時間が経ってしまい、締切直前になって先生にお願いすること」を言語化して、「죄송합니다」と詫げるのである。

(4)大学生から教員へ（推薦状の依頼）

교수님 안녕하세요.

저는 일어일본문화 전공 09 학번 이지수입니다. 아무래도 찾아뵙고 말씀드리는 것이 좋을거라고 생각해서 그러려고 했지만 오늘 교수님께서는 수업이 없으시다고 들어서 부득이하게 메일을 보내게 되었습니다.

EASCOM 프로그램에 신청하기 위한 추천서를 부탁드립니다.

저는 일본에 다녀온 적이 한번도 없지만, 3년간의 전공 학술부 활동과 (마지막 1년은 부장을 맡기도 했습니다) 교류회 참여를 통해 일본어를 열심히 공부하여 아직 성적표는 나오지 않았지만 2013년 1회 JLPT1 급을 무사히 취득했습니다.

4학년이고 마지막 학기여서 신경써야 할 것들이 많아서 포기하려고 했었지만, 아무래도 졸업하기 전에 일본에 다녀올 수 있는 기회를 포기하는 것이 아쉬워서 늦게 결정하게 되었습니다.

그로 인해 신청 마감까지 시간이 많이 남지 않았다는 점에 대해서는 죄송하게 생각합니다.

신청마감은 9월3일 화요일 오후 5시입니다.

마쁘신 와중에 죄송합니다.

先生、こんにちは。

私は日語日本文化専攻09年度学生イジスです。やはり直接伺ってお話したほうがいいと思い、そうしようとしたのですが、今日先生が授業がないという話を聞いて、やむを得ずメールを送ることになりました。

EASCOMプログラムに申し込むための推薦状をお願いしたいです。

私は一度も日本に行ったことはないですが、3

年間の専攻学術部の活動と（最後の一年は部長を務めました）、交流会への参加を通じて日本語を一生懸命勉強し、まだ成績表はもらってないですが、2013年度1回目のJLPTの1級を無事に取得しました。

4年生ですし、最後の学期なので色々やるべきことがたくさんあって諦めようと思いましたが、いくら考えても卒業する前に日本に行けるチャンスをあきらめるのはもったいないと思い、遅くなってしまいましたが、行くことにしました。

そのため、申込みの締め切りまでに時間があまり残っていない点に関しては申し訳なく思っています。

締切は9月3日（火曜日）の午後5時です。

お忙しいところ、申し訳ございません。

それでは、次に、用例(5)をみたい。用例(5)は、教え子の就職を頼むメール談話である。ウリの関係にある場合には、媒体としてメールを用いることは少なく、電話を用いることが一般的であることは前述した。(5)はその意味でウリ談話としては稀なケースである。しかし、ウリなら用いる内容と表現の特徴が、談話展開にみられるため、とりあげた。二重傍線部で、依頼内容を率直に述べている。また、傍線部では、相手の状況を具体的に知ったうえでの依頼であることを記し、配慮を示している。

(5)大学教員間（教え子の日本語教員の非常勤依頼）

강 교수님

추운 날씨, 학기말이라 바쁠텐데 매번 부탁만 하게 되어 미안합니다.

대학마다 여러가지로 어렵고 힘든다는 것 잘 알고 있기에 더더욱 그렇구요.

염치불구하고 제자 김수진 선생 (일본어학 전공) 을 또 다시 말씀드립니다. . . .

오미영 : 010-3333-4444 이구요, 김수진 : 010-6666-7777 입니다.

カン教授様

寒い日が続いています。学期末のお忙しいとこ

ろ、いつもお願いばかりで申し訳ございません。大学ごとに色々大変で厳しいというのは承知しているので重ね重ね申し訳ないです。恥を忍んで、教え子のキムスジン先生（日本語学専攻）を再びお願いいたします…。

オミヨン：010-3333-4444（注：電話番号）で、キムスジン：010-6666-7777です。

以上、韓国語の依頼談話の内容構造と言語表現の特徴的な個所を説明した。

6.4 日本語の依頼談話：収集実例より

次にみる日本語の依頼談話には、これまで述べてきた社会文化と意識態度の反映がみられる。まず、次の用例(6)をみられたい。(6)は、大学院生から指導教員へ面談のアポをとるメール談話である。大学院生と指導教員は待遇的には目上目下の関係であるが、社会的にはウチの関係にある。

下線部の「来週お時間いただけたらと思います。」という表現では、依頼事を、「～と思います」という自身の心情を述べる文の補文中に埋め込んでいる。また、補文中の表現は「来週お時間いただけたら」という仮定形であって、「来週お時間をいただきたい」という言い切り形ではない。また、依頼理由は、「シンポジウムに向けて」ということのみで、依頼したい内容も言葉で明確に指定されているわけではない。お互いに了解しあっていることは言葉にしていないこと、また、言語表現も間接的な述べ方であることが指摘できる。

「お忙しい中、申し訳ありませんが」のように、相手を煩わせることに詫びを述べ、「よろしく願いいたします」という定型的挨拶を添えている。院生が指導教員に指導を請うことは当たり前のことであるが、「お忙しいところ、（ご迷惑をかけて）申し訳ありませんが」という気持ちが込められている表現である。日本語の「申し訳ない」は、状況全体を視野に入れ、恐縮し詫びる気持ちがある。「よろしく願いいたします」は、定型的挨拶であるが、この場合には「（ご指導を）よろしく願いいたします」と受け取れる。

(6) 大学院生から指導教員へ（発表指導のためのアポイントメント取得依頼）

伊藤先生

ご連絡遅くなり申し訳ありません。

シンポジウムに向けてのアポについてですが、先生のご都合がよろしければ、来週お時間いただけたらと思います。

私は、火曜2コマと木曜5コマは授業がありますが、その他の時間であればいつでもかまいません。

お忙しい中、申し訳ありませんが、よろしくお願ひいたします。

小山春子

次の(7)は、学部生から指導教員へ卒業論文草稿の指導を頼むメール談話である。(6)よりは、事情が多少くわしく述べられ、希望の示唆はされているが、どの部分をどのように評価添削してほしいというような具体性はない。依頼事は、「添削していただければと思います。」「とりあえず現段階での評価、添削をしていただければありがたいです。」というように、「～と思います」「～ればありがたいです」の補文中に仮定的に表現しており、文全体は、依頼者の心情を描写するものになっている。また、「忙しいとは思いますが」のように相手の状況を察して恐縮する気持ちを述べ、「どうかよろしくお願ひします」という定型的挨拶を添えている。(6)は沖が、(7)は西尾が収集した事例であるが、よく似た談話展開である。

(7) 学生から指導教員へ（ゼミ生から指導教員への卒業論文草稿に対する助言依頼。予めゼミ生は指導教員から、指定の日までに草稿を提出するように指示されている。）

お疲れ様です。

西部大学文学部**学科4年生の鈴木一郎です。卒論の草稿を、本メールに添付しましたので、添削していただければと思います。

一応分析は前回に比べればある程度進められたと思いますが、分析結果からの考察が自分でも

危ういと感じる部分があったりと、まだ完成とはいえない状況です。

それでも、卒論の提出まで日がないこともありますので、とりあえず現段階での評価、添削をしていただければありがたいです。

忙しいとは思いますが、どうかよろしくお願ひします。

鈴木一郎

次の(8)は、ウチの関係にある高校の先輩から後輩への依頼事であるが、依頼者が同窓会事務局員としての公的立場も担っている場合である。ここでも、依頼事は、「野村さんからお願いいただけたらと思ひます。」というように心情を表わす文の補文中に仮定形で示され、間接的に伝えられる。依頼事の新情報は日取りを「12月8日」で頼むという部分であるが、依頼にいたる理由は両者で了解されているため、言葉にされていない。両者は、場全体を視野に入れているため、依頼が成立する自然な場の支えがある依頼は、言葉の使用が必要最小限であつてもなめらかに運ばれていくことになる。また、「お忙しいところ」というように相手が忙しいことに言及し、「重ね重ねのお願いです」という宣言文を用いているが、これは、「お忙しいところ、(申し訳ありませんが)、重ね重ねのお願いです。」という詫びの気持ちが込められていることは、容易に想像できる表現である。

(8) 高校の山川先輩から野村後輩へ（高山さんへの同窓会サロン講演依頼。山川氏は、同窓会事務局員。）

野村様

あれこれ、あれこれ、

ありがとう。

高山さんにサロン話題提供を、

できたら、12月8日、

野村さんからお願いいただけたらと思ひます。

OKいただけましたら、

私のアドレスを高山さんにお伝えください。

日本語月間となることを願ひつつ

表1 日韓中対照からみた依頼談話の特徴

	中国語	韓国語	日本語
重要な依頼を行える相手	関係（グワンシー）	ウリ	ウチ
互惠関係（個人対個人）	あり	あり	なし
互惠関係の機能または様態	実利応酬関係の強化と情的交流の醸成	ウリ間の親密で隙間のない感情の醸成、軽微なものは様式化	—
「場面意識」	なし	なし	あり
「場面意識」の機能または様態	—	—	両者が場をともにみることで、状況と心情を共有
依頼意識	関係の仲ではないか（相手と自分は同じ感覚）	友達だからこそ迷惑をかける	友達だからこそ迷惑はかけられない
依頼態度	相手が実現しやすいようにはっきりと述べる	率直に、包みかくさず、はっきりと述べる	迷惑をかけて申し訳ないという気持ちで、状況をやんわり述べる
依頼内容	理由、希望、条件を言葉で明確に伝える	自己の実情を率直に言葉にする	場の共有を前提として、状況と心情を言葉にする
配慮の示し方	選択の余地を与える表現と、相手の面子を立てる表現を添える	相手の実情を知って理解していることの表現を添える	迷惑をかけることへの恐縮と挨拶を添える

お忙しいところ、重ね重ねのお願いです。
山川

以上、日本語の依頼談話の内容構造と言語表現の特徴的な個所を説明した。

6.5 依頼談話の内容構造と言語表現

どの言語文化でも、何を依頼しているかは、相手に分かるように述べなければならない。しかし、相手によりよく通じさせるための、内容の選び方と、表現の選択には、言語文化によって個別の特徴があることを見いだすことができた。以下に、総括しておく。

中国語依頼談話の内容と表現

- ・何をどこまでなぜ頼むか、希望、条件、経緯をはっきりと言葉で述べる。
- ・相手に選択の余地を与える表現と、相手の面子を立てる表現を添えると丁寧である。

韓国語依頼談話の内容と表現

- ・はっきりと率直に包みかくさず言葉で述べる。
- ・相手の実情を知っていることを述べる表現を添えると丁寧である。

日本語依頼談話の内容と表現

- ・相手と場の状況を共有していることを前提にしながら、言葉で言わなくても分かることは、あえて言葉にしない。
- ・依頼事は、自分の心情表現として伝える。
- ・相手に迷惑をかけていることを詫げる気持を表す表現と、定型的挨拶表現を添えると丁寧である。

7. 日韓中依頼談話の発想と表現

国廣(1982)の「言語的発想」「文化的発想」を整理しなおし、以上述べてきたところを、一覧できるよう表1にまとめ、結論とする。依頼行動が言語選択を左右していることから、社会文化制度の違いが意識態度に影響し、さらに談話内容の組み立てと言語表現に影響を及ぼしている様が指摘できた。

各母語の談話展開の特徴は、外国語学習時には母語干渉によって負の転移を起こし、相互に人格的誤解を引き起こしていることに気づかない場合がある(沖・趙, 2015)。人・文化・社会・言語を理解し、異文化接触問題の解決をめざすための基礎的記述のひとつに本論を位置づけたい。

付 記

執筆者4名の資料収集、分析、考察をふまえ、対面での議論を重ねて得た内容を、筆頭執筆者がまとめた。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 19520389, 24520498, 15K02561 (研究代表者 沖裕子) の助成を受けた。

注

- 1) 野田(2005)は、こうした問題意識から、コミュニケーション上の問題を引き起こさない日本語教育文法の作成を模索している。
- 2) 言語経歴は、以下の通り。沖裕子(1955年生まれ、0～18：長野県、18～27：東京都23区内、27～31：和歌山県、31～38：奈良県、38～：長野県)。姜錫祐(1964年生まれ、0～18：韓国忠道北道、19～25：ソウル市(内2年間江原道、26～27：USA、27～36：日本、36～：ソウル近郊)。趙華敏(1959年生まれ、0～20：中国天津市、20～22：日本、22～：北京市(内、各1年ずつ日本)、西尾純二(1971年生まれ、0～3：兵庫県、3～19：奈良県、19～22：三重県、22～24：奈良県、24～：大阪府(府内の移動あり))。
- 3) 意識や態度のありかたについては、平賀(2016)が、コミュニケーションにおける参加者のフレームを随時動的に調整していくことに着目する重要性を指摘している。対照談話論における意識態度は、フレーム調整とも関係するが、ここでは、巨視的静態的に日韓中の記述を行う。

【参考文献】

- 尾藤正英 (2000). 日本文化の歴史 岩波書店
千野栄一 (1980). 言語学のためのしみ 大修館書店
平賀正子 (2016). 医療コミュニケーションにおけるフレームをめぐって—前十字靱帯再建手術の患者となつて— 社会言語科学, 18(2), 1-2.
井出祥子 (2006). わきまの語用論 大修館書店
池上嘉彦 (2000). 「日本語論」への招待 講談社
井上優 (2013). 相席で黙ってられるか一日中言語行動比較論— 岩波書店
姜錫祐 (2007). 韓国人と日本人のコミュニケーション行動に関する比較対照研究 日本語学研究, 19, 13-28.

- 国廣哲彌 (編) (1982). 日英比較講座 第4巻 発想と表現 大修館書店
三宅和子 (1994). 感謝の対照研究 日英対照研究—文化・社会を反映する言語行動 日本語学, 13(8), 10-18.
ネウストプニー, J.V (1995). 新しい日本語教育のために 大修館書店
野田尚史 (編) (2005). コミュニケーションのための日本語教育文法 くろしお出版
野田尚史・高山善行・小林隆 (編) (2014). 日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—くろしお出版
沖裕子 (2006). 日本語談話 和泉書院
沖裕子 (2010). 依頼談話の結節法 日本語学研究, 28, 119-136.
沖裕子 (2013). 談話種変換からみた日本語談話の特徴—わかきまえ・察し・見立て・仕立て— 明海日本語, 18増, 223-237.
沖裕子 (2015). 談話論からみた命令表現 日本語学, 33(4), 14-22
沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二 (2010). 日韓中の外言談話にみる発想と表現—日本語と日本語教育のための基礎的研究— 人文科学論集〈文化コミュニケーション編〉, 44, 1-25.
沖裕子・姜錫祐・趙華敏・西尾純二 (2011). 日本語談話の発想と表現 社会言語科学, 13(2), 138-143.
沖裕子・趙華敏 (2010). 発想と表現からみる日本語依頼談話のしくみと指導 日本語教育と日本語学研究, 5, 182-186.
沖裕子・趙華敏 (2015). 日本語依頼談話の特徴と日本語教育 趙華敏 (主編) 跨文化理解と日語教育, pp. 107-133. 高等教育出版社
坂本恵・薛鳴 (2015). 日中の対人関係と日本語教育 趙華敏主 (編) 跨文化理解と日語教育, pp. 134-162. 高等教育出版社
薛鳴・坂本恵 (2014). コミュニケーションを阻害する文化的な違いについて—一日中の「親しくなること」「親しくなるためのストラテジー」の相違を中心— 一待遇コミュニケーション, 11, 86-101.
時枝誠記 (1941). 国語学原論 岩波書店

(2017年10月11日受付)

(2017年12月8日修正版受付)

(2017年12月27日掲載決定)